

CASA新聞

発行 株式会社カーザミカワ
岡崎本社 ☎0564-24-2511
岡崎市吹矢町8番地
豊田営業所 ☎0565-28-3891
豊田市豊栄町6丁目1番地

杉ムク柱品薄で下げ止まり感 国産材製材

国産材製材は、関東で杉ムク柱角などの品薄感が目立ち始めた。10月前後からプレカット工場が抱える輸入材の在庫消化にめどが立ち始め、価格競争力の高い杉ムク柱Dに対する引き合いが強まった。杉ムク柱角などもサイズによって品薄で、生産が間に合わない製材工場も少なくない。こうした動きに連動して9、10月ごろから製材相場は杉柱角KD特等で8万円前後（立方材、市場渡し）の横ばいで推移し、下げ止まり感も出てきている。

春先からプレカット工場は抱えすぎた輸入材を優先的に使ってきた。そのため杉ムク柱KD柱角はもとより、ビルダに1入り込んでいた杉集成管柱の引き合いも減ってきた。それが9、10月ごろからプレカット工場の在庫消化にめどがつき始めた。しかも足元の柱の樹種間の価格体系では、杉ムク柱KDの価格競争力が圧倒的に強い。

柱市場で大勢を占めるWウッド集成管柱は、プレカット工場などがまだ12、13万円（同、プレカット工場着）の在庫を抱えている。ただ、先物の第4・四半期交渉分の価格が8万円前後（同）にまともだったため、流通筋などが逆ザヤでも10万円前後で現物の消化に動いている。同国産品も10万円前後と、軟化傾向をたどっている。これらに競合して市場を拡大してきた杉集成管柱は9万5000円前後（同）だが、杉ムク柱KD柱角は8万円前後（同）と柱関係のなかで突出して価格競争力が高い。

この価格体系は足元の情勢で、9、10月ごろはさらに杉ムク柱角の価格優位性が際立っていた。そのため以前から杉ムク柱KDを使ってきたプレカット工場を中心に引き合いが強まった。一部大手ビルダ1では、プレカット工場の提案で杉ムク柱角を新規採用する動きも出てきている。その一方でビルダー向けに入り込んできた杉集成管柱が価格競争力を失い、需給緩和状態にある。

こうした動きも含めて北関東では、杉柱角の生産が追い付かない製材工場も少なくない。柱角のほかに間柱などもサイズによって品薄感が出てきている。ただ市売市場では荷動きに大きな変化がなく、9月頃まで相場は軟化傾向をたどってきた。そのためこれ以上の下押しは製材工場の生産コストを圧迫し、ウッドショック前の相場に戻りかねないという危機感が強まった。しかしこのタイミングでプレカット向けの出荷が増加傾向に入り、製材工場の強気につながった。そのため市売市場でも9、10月頃から下値探りが緩和した。地合いはまだ固まり切っていないものの、相場は横ばい水準で推移する。ここにきて下げ止まり感を口にする流通業者も目立ち始めた。

ただ、Wウッド集成管柱の先物相場に向かってあらゆる樹種が下値探りを続けている。いずれあらゆる品目が8万円前後に収れんするのは時間の問題で、ここで杉ムクが一定の需要を確保できるかどうか需給相場のカギを握る。

外材製品の動きは低調 中部地区

中部地区では素材、製品ともにウッドショックの反動で値下がりが続くなか、1年を終えようとしている。素材は一部の大径材に高値がついているものの、製品価格は弱含みで推移。外材製品も全般に荷動きが低調で、Wウッド製品などは逆ザヤのなかでも在庫消化が喫緊の課題となっている。また、針葉樹合板の流通も増加傾向にある。

国産材素材は、材価低迷から市場への素材出荷が伸び悩んでおり、出荷制限をかける市場もある。ただ年末に向けて降雪が懸念され出荷増も見込めないこと

から、価格の下げ止まりを期待する声も。国産材製品は松、杉製品ともに弱保合や値下がりでの推移。値下がりが続くことを懸念する流通関係者は少なくないが、伐り旬以降の素材出荷が例年より少ないことから、価格の落ち着きを予想する声も聞かれる。製品商社は素材不足などから役物製品の集荷難化を今後の課題に挙げる。

欧州材製品は値下がりが続くなか、入荷減が続く見通し。在庫量が差から、Wウッド間柱はWウッドの集成管柱より需給均衡が早いと見込まれる。Wウッド集成管柱は杉集成管

柱との競合があり、Rウッド集成平角は競合材や先物価格の影響で値下がりに向かう見込み。ロシア材エゾ松製品はWウッド製品などとの競合が激しい。現状は調整局面だが、先物の情勢から来春には不足に転じる可能性も。米材輸入製品はコスト高のなかで荷動きが低迷しており、国内大手製材の価格改定による値下がり以降は弱保合で推移する。

国産針葉樹構造用合板は引き合いが低調で、流通在庫は増加傾向。メーカーは減産で需給バランスをとり価格維持を図る考えだ。

持ち家前年比18.7%減 10月の新設住宅着工

国土交通省は11月30日、2022年10月の新設住宅着工を発表した。総着工数は7万6590戸で3カ月の減少となった。持ち家の減少は11カ月連続で、減少幅は前年同月比18.7%減と拡大。14年7、10月の20%台に次ぐ減少率を記録した。一方、戸建て分譲と貸家は増加傾向が続き、総着工数の年間累計では前年並みを維持している。

新設住宅着工数は7万6590戸（前年同月比1.8%減）で3カ月の減少が続いている。11カ月連続の減少に加え、10月は2万1834戸（同18.7%減）と前年同月比の減少率が広がった。持ち家は、消費税率

が5%から8%に上がった14年の夏から秋に同20%台の減少を記録している。今回の18%台の減少率は14年以来だ。三大都市圏及びその他地域別では、近畿圏の同14.5%減を除き各エリアで同19%前後の減少で、22年では最大の減少幅となった。

1、10月累計でも21万1944戸（前年同期比10.8%減）。22年は9月まで1桁台の減少だったが、2桁台に乗った。このペースで推移すれば、持ち家の年間累計はコロナ禍で過去最低水準となった20年を下回る可能性がある。一方、分譲住宅、貸家は増加傾向が続く。

戸建て分譲は1万2462戸（前年同月比1.4%増）で18カ月連続増。また貸家は

3万1996戸（同7.3%増）。3カ月連続の3万戸超に加え、8月以降、増加率も同7.9%の水準で推移する。工法別では、在来工法3万2962戸（同8.4%減）、2×4工法8865戸（同5.3%減）。プレハブ工法は1万1133戸（同12.0%増）だが、木質プレハブに限ると1022戸（同4.3%減）と減少で、木造の増加傾向が顕著だ。

22年1、10月の新設住宅累計は71万9710戸と前年同期比0.7%増。マンション、戸建て分譲、賃貸が総数をけん引し、ほぼ前年並み。しかし22年度（4、10月）累計では51万9484戸と同0.8%減であり、4月以降に着工の減少傾向強まっている。

表示説明	値下げ 	横ばい 	値上げ 
市況状況	ラワン薄ベニヤ	●	●
	ファルカタ正寸12mm T2	●	●
	針葉樹12mm 3×6	●	●

